

香取遺産

vol.151

浅間神社古墳 — 仁井宿に造られた巨大古墳

JR佐原駅から東へ1・2 kmほどの線路沿いに浅間神社があります。神社は、高さ5 mほどの小山の上に建てられていますが、実はこの小山、佐原地区では最大級の古墳なのです。

この古墳は「仁井宿浅間神社古墳」と名付けられています。昭和59年の社殿改修に先立ち、市教育委員会が測量調査と試掘を行いました。

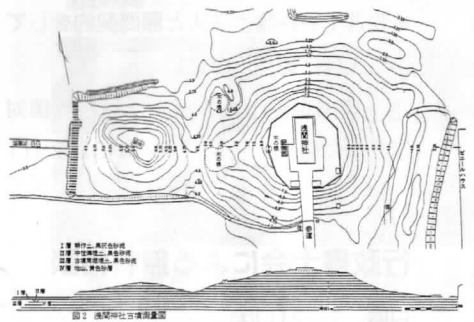
その結果、全長約60 mの前方後円墳であることが分かりました。後円部の直径は約32 m、高さは4・8 m、前方部の最大幅は21・6 m、高さは2・6 mでした。試掘の結果から、古墳の周りに掘られた堀の内側で70 m、外側で90 m前後の規模が推定されています。神社の参道から西側の畑の方を見ると、何となく後円部から前方部にかけてくびれている形がわかります。出土した埴輪などから、6世紀の中頃から後半に造られた古墳と考えられています。

かつて、この辺りは、香取の海とよばれた内海が広がっていました。その香取の海と小野川の沖積作用によって陸地化が進み、縄文時代後期から人々の営みがあったと考えられています。

仁井宿と呼ばれるこの一帯には、浅間神社古墳のほかにも、前方後円墳である変電所裏古墳、円墳と考えられている図能古墳や狐塚古墳、県立病院裏古墳など、今でも大小の古墳が



▲浅間神社古墳後円部近景



▲浅間神社古墳測量図「香取民衆史」より

身近に存在しています。平成17年に実施した変電所付近の確認調査では、新たに円墳の堀の跡が確認されたほか、8世紀後半から10世紀前半頃の集落跡が確認されています。また、昭和61年に小野川放水路工事に伴って行われた発掘調査では、中世の大きな井戸の跡が発見されたことで注目を集めました。

仁井宿は、香取神宮の古文書にみられる井戸庭の比定地とされています。井戸庭は、香取神宮の神官である録司代(ろくしだい)の一族が屋敷を構え本拠とした地で、14世紀の南北朝時代には海夫(かひむ)とよばれる港の機能を持った村でした。やがて、井戸庭村は佐原村に組み込まれて佐原の新しい宿となり、「にいじゅく」と呼ばれるようになりました。

